

昭和五十三年十一月二十七日

平泉 澄先生 午前の部(二)

平泉 七年の夏の初めと思いますが、旅順港閉塞の立案者、そして実行の司令官だった有馬〔良橋〕大将が、明治神宮宮司になっておられた。旅順港閉塞の時は、私は九歳か十歳でしたが非常な感銘を受けました。当時、有馬中佐が指揮官でその下に広瀬少佐がおり、少佐が戦死で中佐になられたんですが、これがわれわれの理想の人物だった。明治神宮宮司の有馬大将がなぜ私を知っておられるかという、外国へでかける前、昭和五年の春早くだったと思いますが、海軍の予備、後備の将官の集まりである有終会で話をしてくれといわれて講演をした。そのときに山崎闇齋先生の話をした。山崎闇齋という人は、今は世間からほとんど顧みられておられないが、かりにいうならば日本の国家哲学というものを考える場合には、その根幹をなすのはこの方の学問・思想であって、それがずっと引き続いて明治維新の大業を成就する。その明治維新の志士というのはほとんど闇齋先生の学問を受け継いだ人だという話をしたんです。だから、こういうふうな思想というものは脈々として流れてきてお

るものであって、そういう伝統につながるものが大切なのだという話をしたんです。

私はそれまで全然知らなかったのですが、有馬大将が有終会の会長でした。私が話をし終わったら立ち上がられて、非常にいい話を聞いて実に感謝にたえない。実は自分は明治天皇崩御のときに御大葬のお供をして、桃山御陵まで行った。御大葬が終わってから、自分の先祖の墓が京都にあるのでそこへお参りをした。ところが自分の先祖の墓のじき近くに、草がぼうぼうと生えておる墓がある。だからかと思つて見たところが山崎闇齋の墓である。どういう人だろうと思つて、帰つていろいろ本を調べてみると非常に立派な学者であつた。これはと思つてその墓の掃除をするようにお寺へ頼んだ。それから自分もいろいろな機会に話をしたことがある。

ところが、自分などの話ではだれも理解をしてくれず、感激してもくれない。いま平泉の話を書いて実によくわかり、またみんなが非常に感動している。感謝にたえないというので懇切な挨拶があつた。それで私はその後外国へ行つてしまった。帰つてきて七年の夏の初めに手紙がきたんです。用事があつてお訪ねしたいが、いつ訪ねたらよいかという手紙でした。それで私は、向こうからおいで願つては申しわけないから、すぐにお伺いしたんです。「ご用でありますればお伺いしたいと思つてまいりました。」「よくきてくださいました。実は山崎闇齋先生が亡くなって今年が二百五十年になります。そこでお祭りをしたいと思う。自分はそれを念願するが、自分にはそれができないからあなたに万事頼めないか」「わかりました、や

りましょう、やりましょうと言つてもそれは私のほうからお詫びしなればならないことで、本来そういうことは私どもが気付き、また計画しなくてはならないことを、気もつかずにおりまして申しわけございません。いたしましょう。」「ついでには一切のことをあなたに任せる。あなたの好きなようにしろ、ここに金が少しある、これは自分のポケットマネーだ。内容は五百円だが、これで全部賄つてくれないか。こういうことは頼めば金を出してくれる人はあると思う。三井・三菱に話をすれば金は出ると思うが、自分は今日まで人に頭を下げて金を頼んだことがない。できれば一生これで終わりたいと思う。それで頭は下げない。君にはまことにすまん。わずかの金でつらからうがこれでやつてくれないか」「かしこまりました」と言つて帰つてきた。

そこで私は壮大な計画を立てたんです。この事業は有馬大将一人とか、私一人でできるものではない。中心となるものを立てよう。そこで闇齋先生の学問の系統を受け継いでいる人であつて、代表的な人物。この人を抜かしてはならないという人はだれだろう。これをひとつ集めなくてはならない。これが私どもはまだ見聞が狭いのでわからない。それは井上哲次郎先生で、当時、イノテツ、イノテツと言つて評判が悪いんです。ところが闇齋学派の哲学という本を書いておられるし、学問は実に広くて正確なんです。人柄とか学風においては私どもの好む学風ではない。人はいろいろ言いますわ。しかし、それはそれとして、知識そのものは先生は実的確である。それで先生にお頼みに行つたんです。「闇齋先生の学問を今日受け

継いでおる学者としては主要な人物はだれでしょう。」先生は即座にたなごころを指すがごとくにおっしゃられた。漢学では内田周平・岡次郎の二人。神道のほうの学問では京都大学の講師をしておる出雲路通次郎、これはほとんど遺族といふべき人だ。それからもう一人は東京の山本信哉ノブキ。これは偉い人でもう動かすことにはできないですね。私はこの点で非常に井上先生に感謝するんです。正確に即座にこれを答えたんです。

そこでそれぞれ頼みに行つて、今度、闇齋先生の二百五十年祭をしたいと有馬大将がおっしゃるが、これに協賛してその中心に立つてもらえませんかとお願ひしました。四人とも何ともいえぬ喜びで応諾された。そこで中心はできた。

今度はお祭り、講演会、展覧会の三つをやる。その会場は東京帝國大学大講堂、それ以外にない。でき得べくんば東京は東京帝國大学は京都帝國大学の講堂を使いたいという、壮大な計画を立てたんです。祭典は祭典ですが講演には内田周平先生、上田萬年先生、徳富蘇峰先生の三人をお頼みしたい。これは三人とも応諾された。展覧会は山崎闇齋及び門人、孫弟子、玄孫弟子と、ずっと日本全国にわたつて、先生は天和二年に亡くなるがそれから明治維新までの全部を集める。

それからもう一つは御贈位。これは難しいことで、私はこれやつてはじめて御贈位というのは難しいことだとわかつたんですが、われわれが宮内省へ申し出たところで許されるものではない。本貫の土地の地方長官を経由しなくてはならないから、山崎闇齋先生は

京都府知事を経由して、申立人が遺族及び学界の主流をなしておる人で、この人のいうことならだれも異論がないという人を、ずっと並べなくてはならない。このつらいの、つらくないのって、これは苦勞でしたわい。

ところがこれは出雲路さんの態度を見て、黒坂先生がいわれたが、ああ、出雲路という人は感心な、ちようど親の法事をする気持でおるんだなといわれたんですが、一生懸命奔走された。

それから偉かったのは内務省の潮恵之輔という内務次官です。私は会ったことはなかったんですが、この人に会って頼んだときにこういわれたんですよ。それは疾く急がなくては間に合いませんわい。とにかくみんなの署名を貰って願書がきたら府知事の判を早く貰って、そして内務省へ持ってきてください。内務省から宮内省へ出すんです。とても普通では間に合わんから内務省から京都府知事へ、取りにきたと言つて人を出すから、こつちのほうは心配するな。下の者の判を早く取れ。こんなことをしてくれる内務次官はありやしません。空前のことですね。これはありがたかった。

それから展覧会は、全国にわたつてずっと集めたわけですよ。これは史料編纂所が協力してくれました。私の仕事に辻先生が賛成されたり、援助されたことは少ないんだけど、これは本来史料編纂所の仕事であるし、自分のほうで欲しいものだから一生懸命協力してください。私のほうでなぜ協力を必要とするかという、物がきたときの保管場所がないんです。史料編纂所には保管場所があるでしょう。来たら保管しておいてくださいと保管先を頼んだら、

そういう協力ならいくらでもすると喜んで保管されて、あとで言われたことは、これがもし官庁の仕事であればおそらく数年かかっただろう。それを平泉は二ヵ月でやった。これは大変な数でしたから驚嘆されました。大講堂の外の廊下に全部並べた。それから大講堂を借りましたが、これは小野塚先生が喜んで協力してくださいました。それで大講堂をお借りすることができた。そして高松宮殿下が台臨になった。秩父宮殿下は何かでおさしつかえがあったんですが、こんなことは東京帝国大学では空前のことです。東大はご承知のように南校が事実上中心ですわい。法学部、文学部は南校の系統でしょう。西洋の学問なんです。日本の学者、日本の学問を東大の大講堂において顕彰するというようなことは前古未曾有なんです。同時にこれはおそらく空前にして絶後です。それをやりとげたんですから、何ともいえぬ驚きだった。

そして御贈位もあつて高い位をお贈りくださった。その時分に私は一人で駆け回るんですからね。人を頼むことはできない。これができるのは国史学科の研究室が主体になって金が欲しいということもないからみんなやってくれた。いちばん骨を折ってくれたのが喜田〔新六〕さん。喜田貞吉先生のお子さんと、国史学科を出て当時助手をしていてくれましたがね。あとは皇学館大学の助教授になりました。喜田さんにご承知のとおり北朝論者ですし、わしは南朝論者です。喜田先生はうちへこられて「きみと山田（孝雄）君と、南北正閏論は、わしらと考えが違うが、あれは間違っているぞ、宮中では北朝の天皇をお祀りになっている」「私は宮中のことは知りませ

ん。どうあそばされるか宮中の思し召し次第で、私は歴史の上からことを考える」「それならいゝが宮内省でも内閣でも、いよいよ北朝のほうを正統と決めたときはどうするんだ」「先生、ご心配くださるな。そのときはそのときで自分は処置しますから」「それからな、それはそれとして新六<sup>シロコク</sup>のことを頼むぞ」「私は新六さんはいいな、方だと思し、よくわかつていますから、この人の将来は私が見ます」「頼むぞ」「先生、ご心配くださるな、南北正閏論は正閏論で先生と私は意見が違いますけれども新六さんの将来は私がおる限り大丈夫です。必ず将来はお世話します」「頼むぞ」と言つて帰られたんですが、その新六さんがいい人で実に献身的にやってくれました。

大講堂の廊下に並べるでしょう。夜の警戒ができないからだれか徹夜でなくてはならない。それを学生がみんなやってくれたんですが、これが天下を驚かせたのは非常なものなんです。東大の大講堂において山崎闇齋先生の二百五十年祭及び大講演会が行われた。内田周平、徳富蘇峰、上田万年がみなその学徳をたたえた。そこへは高松宮殿下も台臨になり、非常に盛大なお祭りがあつた。これは非常に大きな感銘を各方面に与えた。

そのときに小野塚先生が実になごやかな態度で、まことに濟まなければ十分なことができない。ほんの自分の気持だけだと言つてポケットから出して援助してくださつたんですよ。はつきり覚えていないが二十円かそこらだと思います。

金は五百円、有馬大将からお預かりしたんですが、それではとて

もこれはできなかったんです。いろいろな人の多少の寄付と、収益は本が売れたからです。記念図書の出版をやらなくてはならないので、「山崎闇齋先生と日本精神」というのを、それに間に合うように急いで書いたんです。八月に書いて九月中に印刷してお祭りに間に合わせた。この本の収益なんかもあつて、全部で金は七百円ほどできて、それで一切できたんです。

ところが儉約をしているものだから、案内状を出すのに非常に苦労したんです。だれもほかにはわからんから、みんなわし書いたんです。それで私は一ぺん叱られたんです。土佐の山内侯爵家に山崎闇齋先生の学統を受け継いだ崎門の学者のものがいろいろあるんです。その拝借を願ひ出たところが、ころよくいろいろ世話してくださつた係の人のところへ、案内状を出すのを忘れた。それは口で言つてあるからいいと思つて、しなかつたんです。後で借りたいものをお返しに行つたときに叱られて、われわれのほうへはお祭りの案内状も貰わなかつたといわれたので、申しわけございません、会は実はこういう成り立ちで、こういう会計で人を一切使わない、私が全部したんです。物を借りることも、講演の依頼も、お祭りの手順も全部私が出したので手が足りない。やむをえず、口で話が付いたところは手紙を出さなかつたのです。お詫びしますと言いましたら、今度は非常に山内家で恐縮されました、申しわけない、われわれが援助に出なければならぬのに、前のことばはお許しくくださいといわれましたがね。

そのときにある外人に案内状を出したんです。何かの関係で、だ

れだったか覚えていませんがドイツ人でした。それに案内状を印刷したものを入れただけでは読めんでしょう。翻訳も入れて出したんですが、翻訳の手紙を入れておったので切手が足りなかった。他のとは切手が違うはずなんです。それを知らずに入れてしまった。入れたあとでそれに気がついた。ちょうどそのとき私は安ものタクシーを呼び止めて、それに乗ってどこかへ行くときに、郵便局の前に立つておる郵便箱に投げ込んで行った。ふっと気がついて、あれは切手を郵便局で聞き直して貼り加えるべきであつたなと気がついて、おい、帰ってくれと郵便局まで帰って見ると、郵便屋がきて下を開けて取っているところなんです。済まんけどその中の一通だけはまだ切手が足りないと思うから返してくれと言つた。ところが郵便屋は返さない。そうはいかない。あんたの郵便かどうかわしはわからない。人の郵便かもしれないから返すわけにはいかないという。そんなことを言つたつて、私は取るというんじゃない、切手をもう一枚貼るといふんだからいいだろう。何でもいかにというんです。それを局長が向こうから見ておつて、なんじゃなんじゃというので、こういうわけだと言つたら、これはわしが貼ると言つて郵便局長が貼ってくれて、それで済んだ。

ところが、それをずっと運転手が見ておつて、また車に乗つて行ったところが、その運転手が「だんな」「何じゃい」「わしはだんなが好きになりました」「何が好きになつたんだ」「いや、いまの話聞いていたが、だんな、あんたはおもしろい人だ、遊びに行つていいですか」「ああ、いいよ。」そうしたらまたその運転手は正直なや

つで、山本信実先生じゃないが、遊びに来よつたんですが、来たところがこんなものと話のしようがない。何も内容はないでしょう。しかし、この運転手にもひとつの感激があるんですね。わしはあれは相手が日本人なら少しもかまわん。相手が外人であればその外人のところへあれが届けば不足額を取られる。すると、日本人というのは人に迷惑をかけることを何とも思わんと思われては残念だから、日本人の面目上あれは何としても不足額をこちらで払いたかつたんだということで、非常にそれは愉快な話でした。

そのときに京都大学では受け付けなかつたんです。やむをえない、私は京都のほうまで手が伸びないですから、向こうへ任せたところが、京都府教育会というのでやることになつて、ある小学校を借りてやつた。女学校だつたかもわかりませんが、講師は内藤湖南先生をお頼みしてやつた。内藤先生は、自分だけがやるとなあ、年寄りの仕事に思われるから、きみら若いものも加わつてくれ、二人でやるうということになつて行つた。ところが私の一生の中で、こんなに難しい講演をしたことがない。というのは内藤先生はそのとき病氣なんです。その病氣がどういふ性質のものかわしはわからんですが、あるときになると発作が起こつて二時間続く。その二時間を経過すれば何でもない、平常に戻る。ところが、ちょうどそのとき発作が起こつた。講演の日に、実はこういうわけだ、二時間はどうしでも苦しんでおるから、まず講演をやつておつてくれ、発作が治りしだい行く。いつ治るか的確に言えないが治つたら行く、行つたらわしにさせてくれという。そうするとあなた、私は世にも難しい講

演なんですが始めた。講演は全部で二時間ほど予定されておる。私が一時間、先生が一時間で、私はドアを見ながら内藤先生がこられたら、そこで切らなくてはならないからね。こんな難しい講演はいままでしたことがない。いつ切ってもよいように、しかし、来なければ二時間続けるということで、どこまで話したらいいかわからんでしよう。難しい講演でしたがとうとう先生は見えなかつたので、全部私が一人でしたんです。

そのあとで内藤先生が、非常に済まなかつたから、自分はあなたにお礼のためにしかるべき機会に講演をするといわれて、どこかで講演をされて、その講演は非常にすばらしい講演でした。つまり世間では、山崎闇齋という学問は狭くて頑固だと思つておるがそうではないんだ。非常に広い学問で実に精密な学問だ。広範にしてしかも精緻なる学問でありながら、出すときにはエキスだけしかいわない。それであたかも非常に偏狭なように見えるが、それはそうではないんだ。それを私はよく知つておる。

内藤湖南先生ほど支那学において、広範な目の行き届いた人はないですから、この先生の言われることは千鈞の重みなんです。非常にいい講演でしたが、そこでそういうお話があつた。

そこで今度私は秩父宮殿下にご進講申し上げることになりましたが、これは重大なんです。当時の政局の上からいうと重大なことなんです。それから天下に山崎闇齋先生の学問が、東大において顕彰されたということは非常に大きな問題なんです。

そのうちに有馬大将は、ここで私というものを見られたんですね。

私の精神というものを見届けられて、そこで破天荒なことを考えられた。それは陛下へご進講申し上げることです。これはほとんど普通では不可能なことで、有馬大将といえどもどうにもならない。ところが陸軍の大演習のときには、通例、現場の戦争の歴史をその土地の予備将校が、ご講話申し上げることになっている。群馬県であれば群馬県の昔の歴史の中で戦争の話がある。それを現場の予備陸軍中佐とかいうのがやるというならわしになつていた。

ちょうどそのとき、大阪府下における大演習が行われた。七年の秋です。大演習は必ず稲を刈り取つたあとでやる。そうすると大阪府は摂河泉の土地ですから、摂河泉の戦跡となると楠木正成をおいてほかにない。楠木正成、この方の業績を大阪府下のある予備将校が申し上げるといふのはもつたない、できるものがない、これは平泉以外にないんだということで、有馬大将は当時の陸軍大臣の荒木（貞夫）大将に話しをされた。これは陸軍大臣の責任でそういうふうに取りはからつてもらいたい。

荒木大将は世間でも有名ですが、これまたおもしろいもので、先輩、後輩の関係もあるし、実力とかいろいろなことがある。有馬大将の前へ出ると荒木大将というのは子供みたいなもので、それで話をされた。そして陸軍大臣の推薦で私がご進講申し上げるといふことに決まつた。それは公然たることなんです。それは宮内省から命令が出た。

宮内省の何はみんな出ないでしょう。これは文部省とか何かの規制をはずれたことですからね、天皇陛下へのご進講ということは。

○ 七年十二月五日です。

平泉 その前があるんだ、それは後の話でね。大阪府下の大演習は七年の十一月の初めなんです。大阪府へ行ってよいよご進講がはじまるというときになったところ、その前日に大阪府下に行在所が設けられた。お城の中に行在所があるんですが、そこへ私に来て欲しいという呼び出しがあった。大阪へ行けば私はここにおりますということが届けてありますから、そこへ呼び出された。上がったところ、宮内官が、わざわざ東京から来てもらいましてご苦労でしたが、実は困ったことが起こって、陛下は風邪をおひきになった。大演習のご進講というのは野原の風の吹きさらしのところですから、それを非常に心配しておるんですが、どうしたものでしようというご相談があったので、私はすぐ申し上げた。わかりました、ご辞退いたします。何よりも陛下の玉体を大切に考えてください、ご進講はお取りやめ願います、私はこれから東京へ帰りますというので、すぐご辞退申し上げて東京へ帰ったんです。私をご進講するということは新聞に出ていますから、人が見送ったりしておったが、そういうことで取りやめになった。まことに本意ないことであつたんですが、これがまた天祐なんです。天祐というのは宮内省でもそれを毒に思われまして、十二月になつて、大阪で気の毒をしたから十二月五日に改めて、宮中で聞こし召されるというご沙汰があつた。侍従長は終戦のときの総理大臣です。鈴木貫太郎侍従長から、ちゃんと呼び出しが来ましたわい。それで十二月五日に参内してご進講申し上げた。これは内容は言えないんで

す。宮中の陛下とのことは一切言つてはならんことになつておる。わしは言わない。言わないがこれは普通のご進講ではない。これも天の恵みなんです。とにかく陛下がお出ましになつた。私は進み出て控えておる。横におる陪聴者は内大臣牧野伸顕、宮内大臣一木喜徳郎、侍従長鈴木貫太郎、侍従武官長奈良武次、宮内次官〔関屋貞三郎〕はよくしゃべる人でしたわい。そこまでが最前列。第二列は宮内省の局課長がずらつとおる。第三列までおつて、宮内省の主要なる高官は三十人ほど後におる。その前でご進講申し上げた。

大阪で大演習ならば三十分ですが、今度は一時間である。ただし延びてよいというご沙汰で、実際は一時間十五分だったでしょう。ところが驚いたことに普通のご進講と違うのは、陛下からご下問がある、それにお答え申し上げる。そのうちに陪聴者が質問してきた。それに答える。これが非常に私にはよかつた。つまり陛下との問答は慎んでものを言わなくてならない。陪聴者との問答は気楽ですわ。いや、違うんだ、あなたのいうことはこうだと言えりましょう。非常に爽快に話があつて、さあ、どれくらいやりましたか、一時間四十分ぐらいだったと思えますが、それから別室へ陛下はお入りになり、私どもも別室へ下がつて、別室ではさつき最前列におつたそれだけが一緒におつたので、そこでまた話しをした。

そのときに終始一言も発しなかつたのは一木喜徳郎と奈良武次。よく話をされたのは牧野内大臣、その次が宮内次官のこれはちよつと軽い人でよく話をされた。最後には侍従長から賜りものがありました。これは着物をいただいた、恩賜の御衣ですわ。これは焼け残

つて今でもありますが、ちゃんと持つておる。そういうことであつたんです。

ところが、これが世の中に与えたのは、とにかく平泉というものが非常に重いものになってしまった。陛下の御前に呼び出されたことによつて非常に重くなつた。大ぜいの陪聴者がそれぞれの感銘を持つて帰つて、何かの機会にむしろ喜んで話をしたでしょうね。宮中のことは外へもれないはずなんだけれども大体のことがもれてしまつた。

そこで今度はみんな私の話を聞きたいという。宮中のことは別にして、どういふふうを考えるか、日本はどうなるんだ、どうすべきかということ、みんな尋ねてくるようになった。そこで初めて私は本格的に働けるようになったんです。実質上、日本の指導的な地位に立ち得たんです。もしそれまでフランスやイギリスにまごまごしておつたら、この機会は永久にこなかつた。やっぱり一年か半年短縮したということは、時期としてはこの時期をはずすべきではなかつたんです。ちようどそれがうまく間に合つて、みんなが私にものを尋ねた。日本中そのときはどうしていいかわからなかつたわけです。政治、軍事、教育、学問、どういふ方向にいった日本は向かうべきであるのか、だれも見当がつかない。それをこうだということ、私が確信を持つて断定し得る力は、ドイツ、フランスで養われたし、そしてそれを言い得る地位は実は陛下によつて与えられた。陛下が与えてくださったご意思ではないにせよ、実質上はそこにおいて私がそういう立場を確保した。

昭和五十三年十一月二十七日 午後部(一)

平泉 ご進講は昭和七年ですが、昭和七年というのは五・一五の年です。五月十四日だと思ひますが、上野の精養軒で当時重要なことという評論家、憂国の学者、政治家、軍人が大ぜい集まつて会があつたんです。私もだれが呼んでくれたのか、それへ招かれて行きましてわい。そうすると、非常に大きな変革期が迫つてきた。それはいつだろうという話が出た。そうすると維新史料編纂官の藤井甚太郎さんがおつて、徳川幕府が滅びるときに、いまにも滅びそうに見えるおつて、なかなかそれがちよつとやそつとでは滅びるようなものではない。嘉永、安政から随分長い間ガタガタ、ガタガタやつたんだから、いま重大な変革期だといふけれども、そんなにガタガタくるものではない。まだまだだといふ説を述べていたんです。

私はそのときよけいなことを言つてね。それは一方からいうとその逆のことが言えるんで、まだまだと思つているうちにいつの間にか安政の大獄が起り、いつの間にか天王山の戦いが起り、いつの間にか鳥羽伏見の戦いになるんだ。のんきに考えておると、事は明日起こるかもしれないよといふことを言つた。そうしたら明日起こつたんです。私のいうことは非常に適中する。これは自分がさう思うからいふんだけれども、人から見ると何かさういふことに関係があるのだろうか、関係がなければそれを知つてははずはないと、みんなさういふふうに予想する。いろいろなことからして、どうもいろいろな動きというものに、平泉は連絡があるのではないかとい



う心配を、いろいろな人がしたんでしようね。大学でもするし、宮中でもするし、いろいろなことでも私を邪推し、憎む人がありましたが、どうもしかたがないことです。

しかし、五・一五事件が起こっても、さてどうするかはみんな見当がつかない。事件の内容から言って陸軍、海軍が関与しているし、これにどういう根があるのか、背後にどれほどの力があるのかもわからない。みんな非常に混沌として方向がつかなかった。そういう状態でみんなが道を求めることになって、われわれはどういう方向に向かい、どういうふうに進んだらよいかをみんな求めていた。ちょうどそのときぶつかつたのですから、私のいうことはみんなの肺腑を突いた。太平のときに言ったところが、だれも何とも思わない。しかし、いまは目の前にものがひっくり返るんですから、それを見てみんなが非常に動揺してわからないときに道を説くというので、みんな私に着目するに至つた。天皇陛下にもそのときにご進講申し上げた。

そこでみんなが私のところへきた。曙町の小さな借家に住んでおつて、まだ助教ですからね。昭和七年というと三十七ですわ。それへお歴々がみんなくるわけです。私の家は大臣もくれば大将もくる。有名な政治家もくるので大ぜい来しました。

昭和八年正月の十日に大亜細亞協会の創立総会が、華族会館のところの霞山会館であつて、そこに招かれて私は行つてみた。これがどういう仕組みであつたのかわからんが、私は二階へ上がつてその部屋へ入つた。大きな広間がありまして、いすは壁際に馬蹄型に並

んでいて、それにみんなは座つておる。端のほうは空いていて、奥のほうにずっと座つていましたわ。そのまん中に一ついすがあつてそのいすがあれ何いすつて言いますかい。こう阿ひじかけてうしろが丸くなって、こうかけられる大きな立派ないすが一つまん中にあつて、入り口のほうを向いているんです。そこへ近衛公がかけておられた。

それで私はこの入り口へ立つて、まず部屋全体に敬意を表して、それからどちらへ行こうかと思つておつたところが、陸軍の中将が出てこられて、私に「よくこられました、あの中央におられるのが近衛公です」と教えてくださった。そしてその方はすぐそのまま近衛公のところへ行つて、いま入つてきたのが平泉ですということを言われた。その方は小畑敏四郎中将で、これは陸軍きつての戦術家で、これだけの俊敏な頭脳はないんです。敏四郎というのはよく付けられたと思う。ほんとうに俊敏な頭脳で戦術においては日本の至宝といわれる人なんです。その方が荒木大将の右腕とも懐刀ともいわれているんです。七年のご進講のときに荒木さんが私に非常に注目したのが、荒木さんの推薦が利いてご進講になつたけれども、陸軍大臣は宮内官でないからご進講の場には荒木さんが出ることはできない。そこでどんなご進講を申し上げたのかということを知つたかつたんでしようね。そこで懐刀の小畑さんが曙町へきて、私にいろいろ話しを聞かれた。そういう関係があつてこの場の取次は小畑中将がされた。

私はそれを聞いてご挨拶しようと思つてだんだん進んだところ、

近衛公も小畑中将から私の話を聞かれ、すぐ進んでこられて二人はまん中で会って、そこで私はご挨拶の名乗りをあげ、近衛公も挨拶されてまたおかえりになった。私もこちらへ行つてこの辺へ腰かけたんです。これが近衛公にお目にかかった最初です。その日は創立の協議会ですから、私どもは何も言うこともない、近衛公も何もいわれない、その日はそれで終わつたんです。

それが初めですが、その時分の近衛公というのは、国のことを考へるすべての人の輿望を担つており、近衛公によつてこの時局は終息するだろうということで、日本のホープなんです。それでお別れしたところ、やがて近衛公から来てもらえないかというご連絡がありましたので行つた。そうしたところが、あなたは日本の国の現状をどう判断されるか、今後の日本の動向はどうすべきであると考えられるかということ聞かれて、これを私はずっと二時間述べたんです。

とにかく近衛公ほど聡明な人はない。大学の学者がみんなそろつており、日本の知能が集まつておるけれども、私の見た限りにおいて近衛公ほど頭脳の俊敏な人はだれもいない。頭脳が透徹しておる。学者というものはみんな変なところにこだわりがあつて、学問にこだわつたり、何か欲望があることは見ておつてわかる。近衛公という人は欲があるはずがないんです。近衛という日本の筆頭の重臣の地位を千何百年の間維持してきた家に生まれたというだけで尊敬を受けておられるから、近衛公は何も望む必要はない。無欲な人はものが見通せるが、学問があると見通せない。それは恐るべきもので

す。

私はいろいろな方に親しくしてもらつた中で、無欲なるが故に透徹する頭脳というのは、秩父宮殿下、高松宮殿下、それから予想外であつたのは満州国の皇帝溥儀。

話は前後するけれども、満州国で皇帝にご進講申し上げてほしいというご希望があつて行つたんですが、これが五回にわたるご進講で、全世界にわたる歴史を申し上げた。それは事重大で、満州国がどういう国体として自覚されるか、日本との関係をどうするかということがこれによつて決まるのですから、向こうでは非常に重大視して、一日おきのご進講だつたと思います。

宮中でのご進講と同じように重臣が陪聴しておる。国務総理張景惠、宮内大臣熙洽、参議府の長など満州国人が四人おる。陸軍では陸軍を代表して、吉岡安直中将が、皇帝にびたりと付いて離れない。この人は皇帝に殉じたあとシベリアで亡くなるんです。この中将がしっかりした人で、学界もずっと見通した人でした。これがいつか私の講演を聞いて非常に驚いて、東京帝国大学をわれわれはいままでみそこなつていた。東大にはまだこんな学者がおつたのかと言つて、非常な喜びでしたわい。そしてこの決定なども吉岡さんが相談になつたのでしょね。この五人が聴いておるところで、二時間講義をするんです、それを皇帝は黙つて聴いておられた。私は日本語で、それを満州語に翻訳する人がおつてずっと翻訳するということでした。二時間の講義が済んでもうこれで帰ろうというときに、皇帝から質問された。黙つて聴いておられて、みんな覚えてお

られる。そして質問というのは全部急所へばかりくるんです。これはどうですか、これはどうですかというのを見て私は、この人は優れた人だ、いままでこの人はロボットだと思っておったがそんなものじゃないと、非常に驚いたんですよ。

この皇帝を満州国へ持つてくることに関係したのが、陸軍の首脳部であつちの出先機関ですが、それに大川周明博士が関係しておる。それで大川博士に会ったときに、どうも驚いたことには皇帝はロボットかと思っておったところが、すばらしい頭脳ですなと言つたんです。そうしたら大川さんの答えに、実は私もみんな驚いたんです、ロボットにするつもりで連れてきたのがそんなものではなかつたんです。愛新覚羅氏の直系というのは実に優れた頭脳ですわい。康熙帝でも何でも清朝は優れた人がいますわ。これは実はわれわれ案外であつたんです。大川さんのことばそのままにいまは思い出せないのですが、ウラル・アルタイ以东において日本の皇族を除いてあれだけの頭脳はありませんという、非常にいいことばです。私はこの人も日本の皇族の次に加えたい。

それから臣下へさがると近衛公、これだけの頭脳はない。冬の川底の水がずっと澄んでおる、見ると川底の砂が見える。そういう景色をときどき見ますが、会えばその人の腹の底まで見通される。これは人の上に立つ器ですね。くればその人物を見通してしまう、実にすばらしいお方だと思いました。

その方が、二時間じつと私の話を聴かれて言われたことは、よくわかりました、全部わかりました、全部同感です。こういうわれたん

ですよ。そして、「まことに済まんがもう一晩来てもらえますまいか」「けつこうですよ」「私はもうこれでわかつたんですが、木戸侯にもこれを聞かせてやりたい、明日は私と木戸侯と二人そろつて聞かせてもらいたい。」これは木戸日記に出てきます。これは今度は華族会館で晚餐を一緒にしながらお話を伺いたいということで、翌日また行つてかれこれ三時間でした。

そのとき正直にいうと、木戸侯にはかなり抵抗がある。近衛公はすらつと受けられた。近衛公はわかる。木戸侯はいまの学問で、いろいろな学問を好んで、かえつてこだわりがある。結局、わかりましたということであつたんですが、これはほんとうにわかればよかつたんですがね。近衛公としては非常に聡明ではあるけれども、断行力のないお方で、これは貴族の通弊なんです。子どものときから艱難辛苦の中に苦難を排除してくるから断行力が出るのであつて、安穩に育つた者には断行力はない。そこで木戸侯というのは頼みになる。木戸が一緒ならおれは行く、木戸が付いてきてくれなければ、おれ一人では困るところがあるんです。それで木戸侯と一緒にされたんだけど、木戸侯にはどうもそこまで届かなかつたように思う。数年の間は木戸侯はそれほどでもなかつたんですが、あとになると今度は木戸侯が進んでこられるんです。いよいよやってみると自分の学問ではいかない。ここで根本の重臣が私の理解者になつたわけでしょう。それが昭和八年の初めです。

その年の四月に満州に行つた。  
出ているんですか。

○ 出ています、文部省から出張を命ず。

平泉 満州へ出張のときに小畑中将が紹介状を書いてくださった。岡村寧次、河本大作は同期生です。それで名刺をくださったんですよ。それから、食べものに気をつけてくださいよと征露丸をもらった。そのときにある中将が非常に心配して、だいじようぶだろうか、満州は危ないですよといわれたんです。

それ以前に実はもう一つあった。ご進講の済んだあとで非常に心配してくださったのは有馬大将です。非常に喜んでくださったのと同時に非常に心配して、平泉危ないというので、有馬大将は平泉を守ってやってもらいたいと、憲兵司令官のところへ頼みに行かれた。そのときの憲兵司令官の答えがすこぶるおもしろい。大将にどう答えたかわしは知らん。人を介して私のところへ言ってきたことは、有馬大将からご依頼があつたが、どうかあやしいと思つたときは憲兵隊へしないで、憲兵司令官へ直接電話をしてもらいたい。このことばは意味がある。陸軍の中でもなかなか容易ではない。憲兵隊といえども統一されてはおらん。

ところがそんなばかなことを言つたつて、今日危ないと思つて憲兵司令官へ電話するようなことはない。とにかく危険というのは防止することは、絶対不可能なんです。それで私は、有馬大将のご好意は非常にありがたい。しかしながら何ら頼む気はない。自分は日本の国のために懸命の努力をするだけであつて、それが神意に沿わなければ私はやられる。とにかく神様にお任せするというんで、今日は危険というときは必ず単身で行くんです。あの時分、われわれ

と肩を並べるような人がいろいろおりましたわい。そういう人はたいてい用心棒を連れて歩いた。門人を連れて歩きますわい。私は必ず単身である。

それで五・一五のときも曙町の家で、何か用事があつて出ておつて、帰ってきたら家内が「いま恐ろしい人が来ました」「どんな人がきたんだ」「二人来ました、海軍です。それがどう見てもいま人を殺してきたか、これから殺しに行くかどちらかです。お留守だと言つたら、しばらくたつてまた来ますというので帰りました」「そうか、それではおまえは子どもをみんな連れて、植物園へ遊びに行つておいで」と、家族全部が植物園へ出払つた。女子どもがいるとうるさいですからね。どういふことが起こるかもしれない。

そこで単身これを持ち受けた。来た。一人は中尉、一人は少尉でね。そこで、どうぞお上がりくださいと座敷へ上げて、座ぶとんを並べて、どうぞこちらへと言つた。二人はこう座つてこうしてお、お辞儀をしない。何もいわん。しょうがないから「あんた、だれそれ中尉ですか」「そうです」「あんた、だれそれ少尉ですか」「そうです」「お尋ねするがあなた方はわしを敵としてきたのか、味方としてきたのか」「いや、敵ではありません、味方ではないがお話をしたいと思つてきた」「よろしい、敵としてきたのであればどういふ態度をとつても文句はない。敵でないなら今の態度、それは何だ、不作法だぞ。人の家へ入つてきて黙つて座ぶとんの上へ座つて、腕を組んでいるというのは何ごとだ」と叱りつけたんですよ。そうすると二人は、失礼いたしましたとそこで初めて手をつけて挨拶をし

た。

そこでいろいろ話をしたところ、それはみんな五・一五のときの人ですわ。

○ 当日

平泉 当日ではないんです。つかまったあとで、それはもれたんです。しかし、その連中はあとで処分されますが、出動にもれた。つかまって獄へ入っておって、出動しなかったので早く釈放されたんです。出てきてきたんです。実は暫く自分らは獄につながれたが初めてここで大西郷の気持がわかりましたということで、自分らは歴史の中の重要な仕事を果たした人物の一人だという気持で、非常に思いあがっていたんです。

そこで私がいうには、あんななあ、荷物ははずせ。何のことですか。あんたはみんな二人とも大きな戸板を背中に担いでおる。おれは偉いことをしたんだというので、こんなに肩を張っておる。それは重くてしょうがないだろう。そんなことで世の中は通れないんだ。荷物ははずして空身になれば、笑ってすなおに世の中は通れる。荷物をおろせ。

そうしたら二人とも初めて笑って、そこで非常になごやかに変わったということがあります。その二人は私を訪ねてくる前か後か、どっちかわからんが、有馬大将へも行っておる。それはあとから聞いた。有馬大将と私とはこの関係においては連絡は何もない。有馬大将へ伺ったときに、大将は二人が玄関に立っておるところへドアを開けて出られて、こういわれたそうですよ。ばかものども、貴様ら

はやるべきことをやっておるのならば神様になれたかもしれん。なりそこないのばかものどもが、何をうろろ歩いているんだ。やるいいながらやりもしない。この五・一五事件というのは、全国民の非常な喝采を博したんです。あれで初めてみんなのうつぶんが晴らされたんです。もう日本の政治にはあきあきしておる。

私の友人の品川〔主計〕さんがあとで満州国の監察院次長になりますが、この人がそのときの様子を見ておって、実に驚いたということです。品川さんが下関へ着いたときに五・一五の号外が出た。みんなが非常な喜びで号外売りは号外を売るのはなく、ただでみんな読んでくれと言っている。こんなおもしろいことが起こったんだと、みんな大変な喜びようで、鬱懐が一時に開けたというふうな感じだった。

それを見て、今度は出動しなかったものがおれもやったんだ、仲間だったのだということが出てきた。それを痛罵されたんです。はからずも有馬大将のこの態度と私の態度が、この二人に関しては、全く同一轍に出たんです。

それが七年で、そんなことがあって私が満州へ行くときには、みなさんが非常に心配された。満州がまた動乱の最中で、私が行ったときでも川の中を生首が流れているんですからね。それから吉林へ行って私が宿で靴を脱いで入ろうとしているときに、靴をはいて出ようとしてゲートルを巻いている人がおった。立派な人だなと思いなから私は入っていった。それは梅田雲濱先生の、山田勘解由（ヤマダ）という人のお嬢さんを貰われたんですかね。「妻は病床に臥し」の妻は、

その山田家の跡ですわ。梅田雲濱先生ゆかりのお方がそこにおられて、ゲートルをはいて出られた。もちろん銃を持っておる。この人はその日殺されるんです。私は知らなかったから挨拶もしなかったんですが、その日出て行かれて銃殺された。

満州は動乱の最中で非常に危ない。そこへもってきて事情をしておる人は私を非常に心配しておるが、日本の陸軍が危ない、これは何をするかわからない。それである中将が非常に心配して、気をつけてくださいといわれた。私はピストルを用意しない、何らの武装もしない、何びともたのまないで、単身であらゆるところへ入って行ったんです。

そのときに紹介者はすばらしい人の紹介を持っておる、岡村さんにも会った。そのあとで岡村さんの言ったことには、ちょうど私の友人の品川さんがいるからわかるんですが、品川さんに向かつて、あれは何しにきたんだらうな、自分のいちばんの親友の紹介を持ってきたんだが、こうしてくれということは何も言わなかった。私は何らの希望、要求、要請というものをどこにも持っていない。みんなそのときは希望を持っているんです。おれを何とかにしてみたい、どこそこの利権を分けてもらいたいということ、それは汚いものでみんな日本から行く人はそれでやっていくし、なだれをうって行ったんです。

ハルビンでは海軍の小林省三郎少将に会いました。牛のように大きな人で、この方にもご挨拶した。ところが小林さんの言われるのに、何か私のしてよいことがありますか、いや何もございません。

どうぞ遠慮なく、何でも私のしてよいことがあればします。これは非常に親切なことばで感謝すべきですが、なるほどこういうふうでみんなが要求を持って行く。それなのに私は何もありませんと言っていた。

私の満州へ行った目標は、どういう実情であるか、それぞれの人がどんな考えでどんなことをしておるか、それを見に行っただけです。だから要求は何もない。それでずっと見て驚いたのは、もう赤化の手が満州にはずっと伸びている。日本が手をつけるよりはるかに先んじて、はるかに着実に手が伸びておる。日本はその点は何ともいえない浅はかなものですね。みんな地下に本当に入っていてハルビンで地下室へ入って行ったら幼稚園があるんですが、これは驚きました。全部アカの宣伝です。ロシア革命の宣伝でこれは実に驚きました。満州人というものをすべて赤化してしまえ。上では日本の陸軍が暴れていてもかまわん。赤化してしまえば結局はロシアが取れるという見込みでしょうね。それはほんとうに驚いて、これは油断のなんらん状態だと思つて、ずっと見て帰った。

(校訂 照沼康孝)